

仏教に出会った二人の詩人、 ウィリアムズ(アメリカ)と パス(メキシコ)について

田 中 泰 賢

J. W. クルーチは著書『みごとな生命の連鎖』の中でアメリカの詩人、カール・サンドバーグ (Carl Sandburg, 1878-1967) の詩を取り上げて「彼の描いている行商人は、自分で魚を売って歩くのがおもしろくてたまらない様子だから、これは大した人物だと思う」(312) と述べている。ロバート・キヨサキとシャロン・レクターは著書『金持ち父さん 貧乏父さん』の中でアメリカの詩人、ロバート・フロスト (Robert Frost, 1874-1963) の詩を取り上げて、この詩をいつも愛読することによって人生の心構えを学んでいると語っている (32-34)。このようにアメリカの詩人が実生活の中で活用されている様子が分かる。ウィリアム・カルロス・ウィリアムズの場合も彼自身が実生活に密着した詩を書き続けた。このようにアメリカの詩には生活の匂いが強く感じられる。

さてアメリカ現代詩を代表する一人、ウィリアム・カルロス・ウィリアムズはノーベル文学賞を受賞したオクタビオ・パスの詩を訳しているし、オクタビオ・パスもウィリアムズについてエッセイを書いている。従ってウィリアムズとパスの両者について述べるのも面白いと思うが両者の関係についての著書は見当たらない。そこで二人の関係について少し紹介しようと思った次第である。ウィリアム・カルロス・ウィリアムズの父は英国人、母はプエルト＝リコ人であった。彼はペ

ンシルバニア大学で医学を学んだが、そこでパウンド (Ezra Pound, 1885-1972) と出会って、終生の友となった。また彼よりも少し年下の女性詩人、H. D. (1886-1961) との出会いもあった。博士号を取得した後、ドイツのライプチヒに小児科医としての勉強に出掛けている。1910年に故郷に帰り、2年後にフローレンス・ハーマンと結婚している。生涯にわたって医師として、また詩人として、二つの天職を続けた。

ウィリアムズは次のような書物として編集されるほど多くの手紙を書いている。すなわち *The Selected Letters of William Carlos Williams* (1957), *Selected Letters of Ezra Pound and William Carlos Williams* (1996), *William Carlos Williams and James Laughlin Selected Letters* (1989), *The Letters of Denise Levertov and William Carlos Williams* (1998) である。上のような書物を読むと彼は手紙も大切なコミュニケーションの手段にしていたことが分かる。ウィリアムズは日本人の諏訪優氏とも文通していた。氏は「こちらはまだ二十代の若輩だったが、ウィリアムズは筆まめで、東洋の無名の詩人に親切だった」と述べている (5)。またウィリアムズは重病の床にありながら村野四郎氏にも手紙を書いている。その手紙の中でウィリアムズは「詩への理解だけが、異民族を結ぶ唯一のキズナです。両国にむけられる私たちの愛だけあれば、それ以外に、詩人の私たちに何が言えましょう」と述べている (318)。ウィリアムズが詩への理解が異民族を結ぶ唯一の絆であると考えているのは重要である。

彼は詩を作るだけでなく外国の詩を翻訳するという行為によって異民族の理解を高めようとした。その一つとしてウィリアムズはオクタビオ・パス (Octavio Paz, 1914-1998) の詩「遺跡への感謝の歌」“HYMN AMONG THE RUINS” を翻訳している。そしてそれをウィリアムズ自身の作品集 *The Collected Poems of William Carlos Williams Volume 2 · 1939-1962* の中に収めている。翻訳されたものは原作の世界から飛び立っていき、一つの作品として成立するのであろうか。この翻訳は原作はオクタビオ・パスによるものであっても、ウィリアムズは一つの

創造的作品として考えたであろうからこそ自分の作品集に収めたと思う。面白いことにオクタビオ・パスも彼の英語版の選詩集の中にこの詩を収めているのでパスにとっても気に入っている詩の一つであることが分かる。その詩の終わりに [W. C. W] と銘打ってある。つまりウィリアム・カルロス・ウィリアムズが訳したと記されている。

私が愛知学院大学の在外研究員としてアメリカのカリフォルニア州、デービスの町に1990年4月から1991年3月まで一年間滞在していた時、そこの大学の図書館でウィリアムズ関係の文献を調べていたら、オクタビオ・パスがウィリアムズについて書いている本に出くわした。それは『詩人たち及び作家たちについて』(*On Poets and Others*) と題するもので Michael Schmidt が英訳して1986年に出版されている。その中に「ウィリアム・カルロス・ウィリアムズ:ゆきのした」(“William Carlos Williams: The Saxifrage Flower”) と題するエッセイが収められている。このウィリアムズについてのエッセイの最後のところには1973年1月20日と記されている。パスはこのエッセイの中でこの題名にある「ゆきのした」(“Saxifrage Flower”) について「ウィリアムズの詩の中にゆきのしたは岩を突き破って出てくる花であるという一節がある」(“In another poem too he says: “Saxifrage is my flower that splits open rocks.”) と述べてウィリアムズの詩の一節を引用している。そこでこの一節を探すためウィリアムズの全集一巻と二巻及び長編詩『パターンソン』を読んでいくと、二巻の55ページに“A SORT OF A SONG”という詩があり、その最後の所にこの一節があった。コンコーダンスもないので全作品にあたるという作業が必要であった。この詩は次の通りである。

A SORT OF A SONG

Let the snake wait under
his weed

and the writing
be of words, slow and quick, sharp
to strike, quiet to wait,
sleepless.

—through metaphor to reconcile
the people and the stones.
Compose. (No ideas but in things) Invent!
Saxifrage is my flower that splits
the rocks. (下線は筆者)

ある歌

雑草の下で
蛇は待つことが許される
そして作品は
ゆっくりと素早く言葉があるがままに、
突然心に浮かぶのを、静かに待つ、
油断なく

メタファーを通して融和させる
人々と石を。
落ち着きなさい。(事物を離れて
観念はない) 創造しなさい。
岩を突き破って出てくる
ゆきのしたは私の花。

ゆきのしたは英米で珍重される岩生植物であるというが、日陰であれば日本でもいたる所に根付く生命力の強い植物である。身の回りの

庭の目立たないところでひっそりと小さな花を咲かせる。2002年のゆきのしたは5月の中旬過ぎには花も大かた咲き終わり、例年より早かった。花言葉は〈愛情〉を示すという。パスがウィリアムズについて書いたエッセイの題目は愛情を表す花、ゆきのしたであるが、パスは別のところでこう述べている。あらゆる生き物、植物、動物、人間の自然の調和は精神的調和の目に見えるイメージである。この宇宙の和合の本当の名前は〈愛〉である。 (“DIALOGUE, DEMOCRACY, AND PEACE IN CENTRAL AMERICA”, 4) そこには身と心が一つになった愛がある。

「事物を離れて観念はない」(No ideas but in things)の表現はウィリアムズの他の詩にも見られる。五巻からなる長編詩『パターソン』(Paterson)の一卷のところの「事物を離れて観念はないのです—— / あるのはのっぺらぼうの顔つきをした家、 / そしてずんどうの木—— / それは曲がり、先天性と偶然によって枝分かかれし—— / 裂け、筋が入り、しわが入り、斑点がつき、染みがつき—— / 秘めやかに——光の肉体に入りこむ」という表現の中で、又同じ一卷のところの「事物を離れて観念はないのです。 / パターソン氏は帰っていった。 / 休息と執筆のため。乗合自動車のバスのなかで / かれの考えが立ったり坐ったりするのを人は見る / かれの考えはバスを降りて散っていく——」という箇所の中でも用いられている。ウィリアムズはこう述べている。たとえ詩人が世界の人々に与える最大の恩恵が人目につかず聖なる存在を明らかにすることであっても、詩人が語っていることについて人々は知らないでしょう。だから私はパターソンを書き始めたのです。つまり人は確かに都会であり、詩人にとって事物を離れて観念はないのです (Autobiography, 390)。

このウィリアムズの「事物を離れて観念はない」という考えをうまく表しているものの一つがウィリアムズが信頼し、又ウィリアムズを師として尊敬していたアレン・ギンズバーグ (Allen Ginsberg) の詩「夢の中でウィリアムズが書いて」 (“Written in My Dream by W. C.

Williams”）ではないだろうか。この詩は次のとおりである。

“As Is / you’re bearing // a common / Truth // Commonly known / as desire //
No need / to dress // it up / as beauty // No need / to distort // what’s not /
standard // to be / understandable. // Pick your / nose // eyes ears / tongue //
sex and / brain // to show / the populace // Take your / chances // on / your
accuracy // Listen to / yourself // talk to / yourself // and others / will
also // gladly / relieved // of the burden— / their own // thought / and
grief. // What began / as desire // will end / wiser.” //

Baoding, November 23, 1984

（夢の中で W. C. ウィリアムズが書いた「実際ね / きみが自負している / 当たり前 / 真実とやらは // 当然 / 欲望という名で知られ // 無理に / 着飾って // 美しくする / ことじゃない // 歪める / 事もない // 標準化の要 // なし / 分らせようも / ない // 鼻を / つまみ // 目耳 // 舌 // 性器 / 脳味噌を // 皆さんに / 見せてあげて // 運に / まかせ // 正 / 確に // 自分の声を / 聴き // 自らに / 語りかけよ // そうすれば / 他人もまた // 嬉しくも / 救われよう // あの重荷から— / 彼ら自らの // 思い / 哀しみから // 始まりが / 欲望だったから // 終りは / 叡知だよ」

1984年11月23日保定 [パオティン] にて 高島誠訳

この詩を読むとウィリアムズの言わんとした「事物を離れて観念はない」ということがうまく表現されていることがわかる。ギンズバーグは「ウィリアムズが言葉よりも対象と実際に接触してきたからそのようなことが言えたのである」と述べている（*Composed on the Tongue*, 122）。上の詩はウィリアムズとギンズバーグの厚い信頼関係と、ギンズバーグの天才的な詩人の天分による表現が合致したものであろう。自らを仏教徒と呼んだギンズバーグは上の詩で「無理に / 着飾って // 美しくする / 事じゃない // 歪める / 事もない」と語っているが、これは禅の言葉で言えば「柳は緑、花は紅」ということであろう。道元禅

師は「学道は墻壁（かべ）や瓦（かわら）や礫（こいし）が心であるということを知ることである」（身心学道、74）と述べている。更に禅師は「ここで学道する墻壁（かべ）や瓦（かわら）や礫（こいし）が心であるというのは現実であり、体験そのものである」（同上、74）と語っている。草木も壁も瓦も心であるという。禅では四六時中、自分がいるところが修行の場所であると考え。家庭生活と仕事は別のもとは考えない。例えば朝起きて顔を洗ったり、食事をしたり、お便所で用を足したり、仕事をしたり、家の手伝いをしたり、本を読んだり、坐禅をしたりすること全てが修行であると考え。それを身心一如という。そういった考えに近いのがウィリアムズの「事物を離れて観念はない」という言葉ではないだろうか。広岡実氏が述べるように、ウィリアムズは観念や知性を排除したというより（88）、観念と事物との融和を求めた詩人であったと思う。

パスは1951年の11月にインドのボンベイに行き、それから1952年にかけてインドと日本で過ごしている。そして1962年から1968年までインドにおけるメキシコ大使を務めている。だから杉山晃氏が述べるように東洋の影響を強く受けることになる。芭蕉の『奥の細道』¹⁾を翻訳したり、日本や中国の文学をスペイン語圏の国々に紹介したりした（69）。中国や日本の詩の偉大な魅力はその優れた自己抑制にある。インド・ヨーロッパの言語では獲得しがたいなにかである（*In Light of India*, 148）。パスはさらに「二千年以上の時を隔てて、西欧の詩は仏教の中心的な教義をなしているものを発見した。それは自我は幻影であり、感覚や思考や欲望の集合なのである」と述べている（三極の星、30）。

パスは『結合と分離』（*Conjunctions and Disjunctions*）という書物の中で「エバと般若波羅蜜多心經」（“Eve and Prajnaparamita”）というエッセイを書いている。私が1990年から1991年にかけてアメリカに一年間住んでいた時に記録していたノートの一つをひもといてみると、そのエッセイ「エバと般若心經」からいくつか抜き書きをしている。例え

ば「ヒンドゥーのある派は概念形成とその思想の語彙のかなりの部分を仏教に負っており、仏教のある派は女神における神聖の多くをヒンズー教に負う(60)。仏教は最初バラモン教への批判として現れた(61)。インドの宗教伝統の中で仏教はある種の宗教改革であり、バラモン教への批判は終に分離ということになるが、それはプロテスタント主義がローマカトリック教会から分かれたのと似ている(62)。しかしインド仏教の歴史はヒンズー教の正統派とはそれほどでもないが、一連のヒンズー教義との折衷である。その最たるものがタントラ仏教である。ところがプロテスタント主義は回復出来ない断絶があったし、今もそうである(62)。一方は結合のためにバランスを失い、他方は分離のためにバランスを失っている(62-63)。プロテスタントはイエス・キリストの言葉を賛美する。しかしそれはカトリックのミサのようなイエスの犠牲の再現ではない。タントラ仏教の儀式では全てのカーストが一緒になり、身体上の感化のタブーは消え、誓いは共同社会の人々によるものであり、肉体的で、現実的である(66-67)。プロテスタント主義はエロティックな儀式に欠けている。しかしタントラ仏教はとりわけ性的な儀式である(73)。

パスはまた次のように語っている。仏陀の沈黙は知覚ではない。その背後にあるもの、すなわち知恵である。非知。解き放たれてあること、そして分解されてあること。安らぎとは舞踊であり、不動の螺旋の中心における苦行僧の孤独は、女神カーリーの寺院に見られる愛し合う男女の抱擁と一体化する(クロード・レヴィ・ストロース、146-147)。パスはまたこう言っている。宗教改革者としてのゴータマはルターやカルビンを想起させる(Conjunctions, 48)。仏教では批判と倫理から形而上学と儀式へ、キリスト教では形而上学から倫理へと移行している(48)。インド文明が滅びたのは自浄作用と豊饒性に欠けていたからである(50)。般若波羅蜜多心經は大乗仏教では極めて重要なものの一つである(80)。般若波羅蜜多心經は菩薩の教えを高らかにうたう。そして竜樹とその弟子たちはその空の考えに磨きをかけ、洗練させていっ(8)

た (53)。竜樹たちの改革によって仏教は活発になり、世界の宗教として発展していったのである。

パスの著書『詩人たち及び作家たちについて』の作品は José Quiroga の著書 *Understanding Octavio Paz* の年譜に見当たらないが、もしかしたら私の見落としかもしれない。その中でパスがウィリアムズに会ったいきさつとその様子を書いている。ドナルド・アレンがウィリアムズが訳したパスの詩の英語版「遺跡での感謝の歌」(“HYMN AMONG THE RUINS”) をパスに送ってくれたという。その訳が堂々たるものであること、そしてその作者 (author) がウィリアムズであったのでパスは感銘を受けた。ここでパスはウィリアムズに対して訳者という表現をとらず、作者という言葉を用いているのは興味深い。さてパスはぜひウィリアムズに会いたいと誓いをたてた。ニューヨークへ行った時、ドナルド・アレンにウィリアムズの所へ連れて行ってもらうよう頼んだ。ある午後、彼らはラザフォードの彼の家を訪ねた。彼は病気のため半ば体が麻痺の状態だった。その家はアメリカのどこにでもあるような木製の家で、作家の家というより医者の家だった。ところでウィリアムズが亡くなってから37年後の200年8月31日、私はウィリアムズの住んでいたラザフォードの町を訪ね、そして彼の家の外観だけを見ることが出来た。現在は違う人が産婦人科医院を開いていたので失礼にならないよう見学し、ウィリアムズを偲んだ。その家はブルーの色で落ち着いた感じであった。小さな道路を挟んで1888年に建てられた教会がある。この教会はプロテスタント (長老派) であり、教会の中のステンドグラスは荘厳さを醸し出していた。ラザフォードはニューヨークからバスで30分ほどである。ラザフォードのバス停から歩いて5、6分の所にウィリアムズの住んでいた家があった。その近くに図書館があり、そこの若い館員の女性にウィリアムズの住んでいた家を探したが知らなかった。幸いにも年配の女性は「ああ、あのドクター」とわかってくれて地図を書いてくれた。

パスによるとウィリアムズはカミングズ (Cummings) 程口数は多く

なかった。彼の会話は人が感服するというよりは好きになっていく感じであった。ウィリアムズは若い詩人の詩集のために書いた彼の序文のコピーをパスにプレゼントした。それはアレン・ギンズバーグ (Allen Ginsberg) の詩集『吠える』(Howl) の序文であった (22-23)。パスがウィリアムズを訪ねた頃を考えると、彼は1951年に最初の中風にかかっている。しかしギンズバーグが『吠える』を出版したのは1956年であるからその後であろう。ウィリアムズは中風になっても1963年3月4日に亡くなるまで12年間、詩作、翻訳、自叙伝、講義、詩の朗読に没頭した。ウィリアムズの訳したパスの詩「遺跡での感謝の歌」の冒頭は次の通りである。

遺跡での感謝の歌²⁾

オクタビオ パス

泡立つシシリアの海が(リリベオの麓に銀箔をほどこす)ところに……

ゴンゴラ

王冠で飾った時代はその服装を誇示する。
大げさでセンセーショナルな叫び声、
片寄らず、恵み深い
温泉は空の真ん中へ周期的に噴き上げる。
その容姿は一時的な現実の中で見事である。

海は海辺をよじ登って、
岩場にへばり付き、まるで輝く蜘蛛のようで、
山の鉛色の傷がきらきらし、
一握りの山羊はたくさんの石になり、
太陽は海に金色の卵を産む。
一切が神。

壊れた像、
日光によってもろくなった円柱、
死の世界で息づいている遺跡。

最初に掲げられているのはルイス・デ・ゴンゴラ (Luis de Góngora) の詩の一部である。吉田彩子氏からありがたいご教示をいただいた。それによるとこの詩はゴンゴラの『ポリフェモとガラテアの物語』 (*Fábula de Polifemo y Galatea*, 1613年・全504行) の第25行。1～24行はニエブラ伯爵への献辞なので、実質的には、作品冒頭の1行ということになるとのこと³⁾。上のゴンゴラの部分の日本語訳は彼女の訳を借用した。彼女は以前メキシコでオクタビオ・パスに会って、ゴンゴラについて話しあっている。パスはこの『ポリフェモとガラテアの物語』を評価していたとのことである。パスはスペインの詩人、ゴンゴラ (1561-1627) について「ゴンゴラは人生を変える事が出来ないから詩を変えようとした。ランボーは人生を変える為に詩を変えようとした (*Children of the Mire*, 113) と述べている。

1927年、ゴンゴラの死後三百回忌が営まれてから、流れが変わった。ゴンゴラの復権がルーベン・ダリオ (Rubén Darío) によってひき起こされ、様々な優れた批評家たちの研究がそれに続いた (*Children*, 142-143)。ゴンゴラはロペ・デ・ベータ (1562-1635) とともに聖職者であった (*In Light of India*, 141)。ゴンゴラはすでに幼い頃から、古代神話やテオクリトス、ウェルギリウス、オウィディウスなどの引用に親しんだと伝えられる (神吉敬三, 11)。ウィリアムズもテオクリトスの作品をギリシャ語原典から訳したり、またギリシャの古典も読んでいる。そういった所からもウィリアムズがこのゴンゴラの商品が引用されているパスの詩を訳す大きな動機になったと考えられる。

オクタビオ・パスはグッゲンハイム奨学基金で1943年末からアメリカに2年間滞在している。そこでパスはウィリアム・カルロス・ウィリアムズを含むアメリカ詩人たちの口語体の声を知ったのである (José

Quiroga, 11)。さきほど述べたようにパスは *On Poets and Others* という書物の中で “WILLIAM CARLOS WILLIAMS : The Saxifrage Flower” と題してウィリアムズについて次のように書いている。20世紀初頭英米文学に一つの変革が生じて、それが散文、詩、シntax、感性、イマジネーションなどに影響を与えた。その旗手の一人がウィリアムズであった。彼は詩作活動に没頭し、詩作を通して国内のみならず国外の友人が出来ていった。彼の影響と友情はアレン・ギスバーク、ロバート・クリーリー、ロバート・ダンカン、英国の詩人、チャールズ・トムリンソンにとって運命を決める程大きかった (14)。

パスはこう述べている。アメリカ文学が世界的な文学に、つまり現在の世界の文化や歴史を構成する一部となった。メルヴィルやポー、ホイットマン、ジェームズ、フォークナー、エリオットのいない19世紀や20世紀を考えることなど出来ない (中央公論, 37)。パスは自分の国メキシコとアメリカを比較している。米国人は理解したが、我々は静観したが。彼らは活動家だが、我々は無為主義者である (孤独の迷宮, 16)。総じてアメリカは現代工業社会のどこよりも無制約の利己心に基づく経済社会である。また貧富の差も一番ひどく、社会福祉の供給が最も貧弱な国でもある。そして驚くほどの犯罪が発生している。アメリカの殺人事件の発生率は、西ヨーロッパの大都市のそれと比べると十倍であり、また、銃器を使った強盗発生率は二十倍にもものぼる (ケネス・ラックス, 250)。さきほどの詩の最後のところで「死の世界で息づいている遺跡」とあるが、それと反対に、死を否定する文明は、ついには生を否定することにもなる。現代の犯罪者の完全さは、現代技術の進歩の結果だけではなく、まったく自発的に死を隠そうとする試みに必然的に内在する生への軽視からもきている (孤独の迷宮, 56)。そういったことを考えるとウィリアムズがこの詩を訳した意義は大きい。パスの詩は次のように続く。

夜がテオティワカンを訪れる。

ピラミッドのてっぺんで少年たちはマリファナを吸っており、
耳障りなギターの音が聞こえる。

どんな雑草が、どんなよどみなく流れる水が私達に命を与え、
感謝の詩、スピーチ、ダンス、町そして
計量器を制する物語り、言葉を
どこで発見するのか。

メキシコの歌は呪いの言葉の中で
沈黙する赤色の星や、出会いのドアを
閉ざす石を爆破する。
大地は腐った俗世の味がする。

眼を注ぎ、手で触れる。
ここでは少しのもので足りる
ヒラウチワサボテン、珊瑚色で刺だらけの小宇宙、
帽子をかぶった無花果、
復活の味がする葡萄、
二枚貝、手に負えない娘時代、
塩、チーズ、ワイン、太陽のパン。

1990年の秋にオクタビオ・パスはノーベル文学賞を受賞した。私はオクタビオ・パスの国、メキシコを1991年の1月18日(金)から26日(土)まで訪ねた。1月19日(土)、メキシコ・シティのチャペルテペック城を見学していると、高校生らしい若者たちがインタビューしてもいいかと言う。「メキシコのことをどう思うか」、「何日メキシコに滞在するか」、「ペルシャ湾戦争をどう思うか」等を聞いて来た。これは面白い出会いであった。ウィリアムズが訳したオクタビオ・パスの詩「遺跡での感謝の歌」に書かれているテオティワカンにメキシコからバスで行くとき、切符売りの人に「お手洗いはどこか」と尋ねると、その人は売り場の入り口を開けて、わざわざ案内してくれた。そのようなメキ

シコの人々の態度から、ウィリアムズの家を訪ねて、ウィリアムズより夫人のフロスと話がはずんだジャック・ケルアック (マリアニ, 730) もメキシコが気に入っていたのも合点がいった。メキシコは短期間ではあったが、どこでも親切であった。その親切は奥ゆかしいものであった。どこにいても風景が絵になった。テオティワカン遺跡には太陽神と月神のピラミッドあり、月神のピラミッドに登った。上から眺めるテオティワカンは雄大であった。

テオティワカンは紀元六世紀、世界の大都市のひとつであった。今日でも多くの寺院、貴族の家、壁画、大型アパートに感銘を受ける (*Fielding's Mexico*, 181)。アステカ神話に次のような歌がある。

「全てが夜で / 昼がなく / 光がなくなった時 / 神々が集まった /
テオティワカンに。」

アステカの人々はこの偉大な都市をテオティワカン、言い換えれば神々が作られた場所であると呼んだ。彼らの神話によると、神々はテオティワカンで自己を犠牲にして、太陽と月が生まれた。アステカの人々はその五番目の太陽の時代に生きたのだと (同上, 181-182)。テオティワカンのピラミッドはエジプトのピラミッドと違ってほとんど墓を含まない。つまりその目的は寺院を支えることであったから (同上, 185)。パスの詩の終わりの所に「大地は腐った俗世の味がする」と表現されているのはそのような自我の幻影性を表している。

一人の島の少女が浅黒い丘から私を眺め、
光で包まれたすらっとした大聖堂。
海岸の青々とした松を背にした塩の塔、
船の白い帆がそびえ立つ。
光で海にお寺が建つ。

ニューヨーク、ロンドン、モスクワ。
影は幽霊のような蔦で、
その揺れ動き、興奮した植物、
そのネズミ色の柔毛、そのネズミの群れで
平野を包む。
時々、弱々しい太陽がぶるっと身震いする。
ついこの前まで、都市だった丘にもたれて
あくびをするポリフェモス。
低地のくぼみで群衆がのろのろと動き回る。
最近まで人々は彼らをきたない動物だとみなしていた。

ウィリアムズはアメリカの未来を具体化したり、アメリカ民主主義を
普遍化したりしようとはしない。そのようなプロジェクトの遺跡を彼
の詩は明示する。遺跡は他のものと同じほど雄大で、深い感銘を与え
る。大聖堂はキリスト教徒の永遠の遺跡であり、仏塔は仏教徒の無の
遺跡である。しかしアメリカの大都市やその郊外は未来の生きた遺跡
である。このような大きな産業の屑入れで進歩の思想は行き詰まって
いる。過去の巨大主義、インカ、ローマ、中国、エジプトと同じよう
に現代世界で終わる未来の巨大主義が子供じみた砂丘の楼閣に見える。
アメリカは一つの世界を手に入れたが、ホイットマンが信じた魂、宇
宙的未来を失ってしまった (*On Poets and Others*, 20-21)。

日々のすてきな形を目にして、触れてみる。
光は波動し、全ての投げ矢と翼。
テーブルクロスワインの染みは血の匂いがする。
珊瑚が海の中で枝を伸ばすように
私はこの生活時間すなわち興味をそそる調和の中で
成就する瞬間へ平常心を広げる。
昼、あつという間に小麦の穂が重くなり、

永遠のあふれるばかりの聖杯。

私の思いつきは裂け、さ迷い、もつれ、
再び動き始め、
そしてついに進展がなくなる、終わりのない川、
瞬きしない太陽の下の血の三角州。
そしてこの淀んだ水の撥ねかかる中で全てが終わらねばならないのか。
昼間、活発な昼間、
二十四の筋のある輝くオレンジ、
全てがそれぞれ興味をそそる甘さ。
精神に形態を与え、
敵意を持った人々が一つになり、
良心の鏡が溶け、
もう一度伝説の泉、すなわち
人間はイメージが咲く木々、
花から実がなるように、言葉から行いが生まれる。

2行目の「投げ矢」にあたる場所はパスの詩の原文（スペイン語）⁴⁾では“dardos”となっている。この意味は投げ矢あるいはダートである。ところがウィリアムズの英訳では“darties”となっており、意味が不明である。

さてパスはこう述べている。ウィリアムズは詩作を始めた頃から、観念 (ideas) というものに対して不信を示した。それはアメリカのプラグマティズムと彼の医師という職業とが入り交じったものから来ていた。彼は作品『バターソン』の第1巻の初めのところで「事物を離れて観念はない」と書いている。しかし事物は常に向こうにあり、事物そのものには手が届かない。ウィリアムズの試みの主眼点は事物ではなく感覚作用 (sensation) である。けれど感覚作用は形がなく、瞬間的である。人は純粋な感覚作用でなにもものも築いたり、行うことは

出来ない。それは混乱を引き起こすだけである。感覚作用は私たちが事物につなぐと同時に私たちが事物から引き離す二重の性質がある。ドアを通して私たちは事物に入るが、しかしドアを通して事物から出て、わたしたちが事物でないことに気が付く。感覚作用が事物の客観性に従うためにはそれがそれ自身一つの事物に変わらなければならない。変化の仲介者は言語である。すなわち感覚作用が言葉の対象になる。詩は言葉の対象であり、その中で二つの矛盾する特性、感覚作用の活発さと事物の客観性が融合する (*On Poets and Others*, 15-16)。

1991年1月22日(火)アカプルコで私はつぎのような印象を書いた。

メキシコ アカプルコにて
片腕の少年よ
君の優しい心を
メキシコにてもらいました。
オクタビオ・パスの国
メキシコにきてから
とても考えることが
多くなりました。

片腕の少年よ
君の鋭い目に
僕ははっとしました。
メキシコの人々の
汗にまみれて働いて
いる姿を君の
背中に見ました。

片腕の少年よ
どうか一生懸命

生きて下さい。
このアカプルコで
生まれたと聞きました。
美しい海、青い空
優しい人々の
のびのびと戯れる
人々の住む町

更にパスは次のように語っている。感覚作用はウィリアムズにとって本質的に電気、蒸気、ガスと異なる力 (a force)、すなわちイマジネーション (imagination) の作用によって言葉の対象になる。ウィリアムズはイマジネーションは対象を作る創造的力と見なしている。詩は感覚作用あるいは事物の替え玉ではない。イマジネーションは表すのではない。つまりそれは生み出して行く。その生み出されたものが詩であり、以前にはリアルではなかった対象物である。自然が松や雲や鰐を生み出すように、詩のイマジネーションが詩や絵や大聖堂を生み出して行く。イマジネーションは電気のようにエネルギーの一つの形であり、詩人は伝達者である。ウィリアムズは詩的イマジネーションを一つの活動と考え、その活動が科学を申し分のないものになると同時に、科学と競争して行くのである。グリスの絵の山や海は山や海ではなく、山や海を描いたものであると、ウィリアムズは言う。詩の事物は事物ではない。すなわちそれは知力の記号を事物と交換する言うに言われぬものである。

人間が触れるもの全てに意味が満ちあふれている。意味は知らぬ間に詩の土台を崩して行く。意味の破壊行為から詩を守るために、詩人たちは言語の物質的な側面を強調する。言葉は事物であり、また意味であるという言語の二面性に対して、ウィリアムズは散文は詩が成長する地表であり、ユーモアはイマジネーションへの刺激であると対処する。ウィリアムズは詩の種を蒔く人である。アメリカ語は埋められ

た種であり、詩のイメージーションによって水が引かれ、日が照れば実をつけることが出来る。ウィリアムズは言語の手段によって事物と感覚作用から歴史の世界へと渡っている。彼の作品『パターソン』はそのような関心事から生まれている。『パターソン』はアメリカの工業を持つ東部の都市の伝記であり、一人の人間の歴史である。そこでは都市と人間がとどろき流れ落ちる滝のイメージに融合している。滝は言語そのものである (同上, 16-19)。

注

- 1) オクタビオ・パスは俳句も作っている。それについて須原和男氏は「世界で最短の定型詩であるにもかかわらず、俳句は、その器の中に「全世界」をも包摂しうる詩型だと見ているところが眼目と言えよう。そのことを日本の俳句作者ではなく、ノーベル文学賞を受賞した、海外の有力な現代詩人の一人 [オクタビオ・パス] が道破しているところに意味がある」と述べている。(「外国語俳句の現在」『Walpurgis 2002』國學院大学外国語研究室・外国語文化学科紀要 (2002, 43-54))
- 2) 『オクタビオ・パス詩集』真辺博章訳 (土曜美術社、1997) を参照して訳した。感謝します。
- 3) 吉田彩子氏からの書簡 (2002年4月13日付け)。ちなみに吉田氏は著書『ルイス・デ・ゴンゴラ 孤独 [翻訳・評釈]』(筑摩書房、1999) 及び論文「ゴンゴラとバロック」『清泉女子大学紀要』23、1975 (46-55) 等多数書いておられる。
また東京大学教養学部資料室でルイス・デ・ゴンゴラの *The Fable of Polyphemus and Galatea* (Translated and Analyzed by Miroslav John Hanak, 1988) を参照した。吉田氏及び東京大学に感謝します。
- 4) 神戸商科大学図書館より Paz, Octavio の *La estación violenta*, 1978 を参照した。なおまた愛知学院大学図書館には全般の文献において協力いただいた。感謝します。

引用文献

- 道元『全訳 正法眼蔵 卷一』中村宗一他訳、誠信書房、1971。
Foster, Lynn V. & Foster, Lawrence. *Fielding's Mexico 1991*. Fielding Travel Books, 1991.
Ginsberg, Allen. *Composed on the Tongue*. California: Grey Fox Press, 1980.
———. *White Shroud Poems 1980-1985*. New York: Harper & Row, Publishers,

- 1987.
- . 『白いかたびら』 高島誠訳、思潮社、1991.
- 広岡実「破壊と変容と抵抗の美学——W. C. Williams の後期の詩における「火」のイメージについて——」『外国文学研究』56, (1982), 87-104.
- キヨサキ, ロバート+レクター, シャロン『金持ち父さん 貧乏父さん』白根美保子訳、筑摩書房、2001.
- クルーチ, J. W. 『みごとな生命の連鎖』太田芳三郎訳、みすず書房、1987.
- ラックス, ケネス『アダム・スミスの失敗』田中秀臣訳、草思社、1998.
- Mariani, Paul. *William Carlos Williams: A New World Naked*. McGraw-hill Book Company, 1981.
- 村野四郎『現代教養文庫 563 現代詩のこころ』社会思想社、1968.
- Paz, Octavio. *Children of the Mire Modern Poetry from Romanticism to the Avant-Garde*. Translated by Rachel Phillips. Harvard University Press, 1974.
- . *Conjunctions and Disjunctions*. Translated from the Spanish by Helen R. Lane. New York: The Viking Press, 1969.
- . “Dialogue, Democracy, and Peace in Central America.” *The Transition from Authoritarianism to Democracy in the Hispanic World*. Edited by Stephen Schwartz. San Francisco: Ics Press, 1986.
- . *In Light of India*. Translated from the Spanish by Eliot Weinberger. Harcourt Brace & Company, 1995.
- . 『クロード・レヴィ=ストロース』鼓直 / 木村榮一訳、法政大学出版社、1988.
- . 『孤独の迷宮』高山智博 / 熊谷明子訳、法政大学出版社、1982.
- . *On Poets and Others*. Translated by Michael Schmidt. New York: Seaver Books, 1986.
- . 『三極の星 アンドレ・ブルトンとシュルレアリスム』鼓宗訳、青土社、1998.
- パブロ、ピカソ『ゴンゴラ詩集 ピカソ手稿・素描集』監修・序文 高階秀爾、英文・序文 ジョン・ラッセル、解説・翻訳 神吉敬三、美術公論社、1989.
- Quiroga, José. *Understanding Octavio Paz*. University of South Carolina, 1999.
- 杉山晃『ラテンアメリカ文学バザール』現代企画室、2000.
- 諏訪優「ウィリアムズと若い詩人たち」「パタソン葉」『パタソン W. C. ウィリアムズ詩集』田島伸悟訳、沖積社、1985.
- 『中央公論文芸特集』夏季号、1991.
- Williams, Carlos William. *Paterson*. Revised Edition Prepared by Christopher MacGowan. New York: New Directions, 1955.
- . 『パターソン』沢崎順之助訳、思潮社、1994.

———. 『パタソン』 田島伸悟訳、沖積社、1985.

———. *The Collected Poems of William Carlos Williams. Vol. 2 : 1939–1962.*

Edited by Christopher MacGowan. New York: New Directions, 1991.